

## 森の贈り物(3)

『リンバロストの乙女』を中心に

青 嶋 由 美 子

### (4) ディケターでの新生活

家族に祝福され、新しい門出をきった新婚の二人は、ディケターで家庭を作り始める。随分と年代を経ていたポーター家の建物は、新婦ジーンを迎え入れるため、家具の入れ替えを終え、ペンキの塗り替えを済ませ、壁紙も新しいものに張り替えてあった。夫チャールズは、ジニーヴァにある店へと、毎日汽車に乗って出勤していった。ジニーヴァの街は、大層小さくて魅力に乏しく、社会生活と呼べるようなもの存在しない街であった。チャールズは、ジーンがそのような街で家庭生活を営むことを望まなかったため、二人の本拠地は、ディケターに置かれたのであった。彼は、自分が通勤の不便を負っても、ジーンに心地よい生活を送らせようと努力した。しかし、時には、最終の汽車に乗り遅れて、帰宅することが出来ず、ジーンが孤独に夜を過ごさなければならないこともままあった。そんな折り、ジーンは、チャールズに宛てて手紙を綴った。その日一日の出来事を取りとめもなく書いたものが多いが、二人の間の愛情の絆を確認するには十分なものであった。ここにも、文章を書く事の大好きなジーンの姿が見られている。

一方、ジーンが居なくなった後、ストラットン家の人々はどのように暮らしていたであろうか。父マーク・ストラットンは、ジーンが去り、淋しい日々を過ごしていた。日常の細々とした出来事 例えば、豆の花が満開になっているとか、馬鈴薯の花の蕾がふくらみ始めた、教会

の会合に誰が出席していたかといった内容を

知らせる手紙のやり取りを繰り返して、時折ジーンと会うことを大変楽しみにして余生を送った。彼は、結婚前のジーンと共に暮らしたエイダ・ウィルソンの家での生活を、1890年1月10日に死去するまで続けたのであった。兄アーウィン一家は、1887年秋に西部へと旅立った。父マークは、ジーンと共に大層悲しかったものであった。

### (5) 母として、そして新しい家へ

結婚後二年して、ジーンの呼び名が、妻から母に変わった。丸々とした薔薇色の女の子が二人の間に授かったのである。その女の子は、父親チャールズが敬愛してやまない姉の名前をとってジャネットと名付けられた。

ジャネットが二歳になった頃、ジーンは一度目の引っ越しを決意した。チャールズの仕事場であるジニーヴァの街との往復が、彼にとってもうこれ以上ためにならないと、ジーンは感じ取ったのであった。最初のうち、この決意に対しチャールズは、賛意を示さなかった。しかし、ジニーヴァの街は、新婚当時よりは幾らか住み易さを示していた。チャールズは、気に入らないような出来事が一度でもあれば、直ちにディケターへ戻るという条件を、ジーンにつけたが、ともかく、三人は、ジニーヴァの高い柵で囲まれた黄色い家へと移った。ジーンにとっての家とは、まさに、家族の在り方と直結するものであった。後にホープウェル農場と名付けられた

家で、母メアリーと共に過ごした至福の時への思い出と切り離せないためである。ジーンは、紡ぐ小説世界には、家そのものの描写が目立つ。それは、当時の女性にとって、家という場が生活の中心地点であったということ以上に、幸せな家族の図を象徴するのが家だという概念が、ジーンを占めていたためであろう。三人が新居とすることになったその家には、林檎、桃、そして梨の木々から成る果樹園もあった。裏庭には、数羽の鶏であれば飼うことの出来る小さな鶏小屋もあった。馬を繋ぎ、四輪馬車を仕舞っておくための納屋、ペット兼食用として飼っている鳩のための小屋も備えていた。

自らの子供時代を思い出してか、ジーンは、ジャネットがいつでも外遊びを楽しめるような環境を整えてやった。ジャネットには甘い父親であるチャールズは、砂山、滑り台、シーソー、ブランコ等を作ってやった。その家で娘は段々に成長していった。

ジーンは良き妻であり母親であった。常に家を清潔に保ち、美味しく温かい三度の食事を作る。娘を躱げ、また、娘の衣類を全て手作りにした。この手作りの習慣は、娘ジャネットが十二歳になるまで続けられた。

このジニーヴァの街で、ジーンが心惹かれるような人物は殆ど居なかった。だが、家事の合間をぬって、彼女は週に一度、ヴァイオリンのレッスンを続けていった。その教師は、インディアナ州のリッチモンドからやってくるのであった。また、刺繍や陶磁器への絵付けを学ぶクラスにも積極的に参加した。さらに、街の文芸クラブのメンバーとなり、少女時代から興味を持ち続けていたホイットマンについて発表を行った。

ポーター氏の事業は、ジーンとの結婚後も順調に発展していった。薬局だけでなく、ジニーヴァ銀行を設立して、その頭取に就任した。新しいビルを建て、そのなかで、薬局、銀行、さらにホテルを経営した。共同経営者にも恵まれ、収入を増やしたチャールズは、街から5マイル程離れたところに360エーカーの農地を手に入れた。その土地に、彼は、家畜小屋や、穀物

畑、果樹園、野菜畑、酪農製品を作る施設を広げていった。さらに、折りからの石油ブームにのり、彼の土地には、60もの石油掘削用の井戸が掘られ、そのリース料だけでも、相当額の収入となった。そして、ジーンにとっての二度目の引っ越し先となる新居の建設が始まるのであった。

#### (6) リンバロスト・キャビンでの生活

その新居は、十四の部屋を持つ二階建てのものとなった。一階部分は、ウィスコンシンから運ばれたアカスギの丸太で作られていた。それらの丸太は生地色を活かしており、四隅の柱は斜め継ぎになっていた。そして木々の隙間にはセメントが詰められた。二階部分と屋根にはセカイヤメスギのこけら板が、これもまた、生地色に塗られて用いられていた。この家には「リンバロスト・キャビン(Limberlost Cabin)」という名前がつけられた。これは、ジーンにとっての大きな創作源となっているリンバロスト湿地(the Limberlost Swamp)からとられた名称である。後に本稿で扱う『リンバロストの乙女』や、その前作にあたる『そばかすの少年』は、このリンバロスト湿地を舞台として繰り広げられる物語である。このジニーヴァの街の南部に約25,000エーカーにわたって広がっているのは、開墾の手の入らない、草の生い茂った湿地帯で、藪や森林で蔽われていた。かつて、リンバーという名前の男性が、この湿地帯に、犬を一匹連れてただで狩りに入っていき、結局、リンバーも犬も戻ってこなかったことから、リンバロストという名前がついたとされている。人が足を踏み入れないためか、逆に、花々や、鳥類、動物にとっては楽園となっていた。幼い時から、自然界に深い興味を示し続けたジーンにとっては、まさに絶えることの無い魅惑の場所であったが、そこは又、あらゆる悪人達が秘密の連絡を取り合う地でもあり、女性一人で立ち入るには、危険な所でもあった。

リンバロストの木々のてっぺんから射し込む太陽の光に映えると、鳥達の色合はずっと鮮やかで

輝いて見える。派手な色をした花が、太陽の方へ顔を向けているのよりもずっとキラキラしている。沼地を泳いでいる鷺は、そこに咲く白百合よりも遥かに白い。秋の麒麟草の最も美しい一枝でさえも、ポルチモアムクドリモドキの艶やかな金色の胸毛にはかなわない。アオカケスは、菖蒲の群生よりも濃い青色をしている。ズアオアトリは、ヤナギアザミ(柳薊)よりもはっきりした紫色だ。<sup>1)</sup>

上述のように、ジーンは、リンパロスト湿地の鳥類を注意深く観察していた。彼女は、それだけでは満足せず、新居の一部に温室を作り、その中に大きな鳥籠を置いた。十匹から二十四匹という数のカナリヤ、鸚鵡、さらには一番いのオーストラリア・ボタンインコさえも飼っていた。

ジーンは野性の鳥類や蛾の写真家としても知られているが、彼女を写真の世界へ引き込んだのも、このメイジャーという鸚鵡がきっかけであった。クリスマスに近い或る日曜日の夜、家族で囲む食卓に、シチューに入った牡蛎を求めるメイジャーの姿があった。ジーンは、その様子を見て、「カメラが欲しい!」と叫んだのであった。チャールズとジャネットは、お金を出しあい、ジーンにとっての初めてのカメラをその年のクリスマス・プレゼントとした。野性動物の生態を捉えるための、さらに大型のカメラを、自分自身の宝石を売却して求めるまでの間、ジーンはこのカメラを大切に使った。

ここで、ジーン・ジャネット親娘の関わり合い方を見ておきたい。何故なら、この二人の親娘関係は、本稿で扱う『リンパロストの乙女』での主人公エルノラと母マーガレットの関係に大きな影響を与えているためである。

ジャネットは大小様々な人形を十体持っていたが、その人形遊びのために、色々な家事を母から教わった。まず、裁縫であるが、破切れでキルトを作り、それ等を縫い合わせて人形用のシーツや布団の作り方を学んだ。人形用の折畳みベッドを、いつもきちんとしておくためにベッド・メイキングのやり方を覚えた。人形用の

小さな衣装箆笥には、しわにならないように丁寧に畳んだ人形の洋服がしまわれるようになった。戸外の林檎の木の下には、本物の調理器具とオープンが置かれていた。そこで、美味しいちょっとした料理を作ることを教わった。ドール・ハウスでは、埃を払い、掃除をし、その後、雑誌から切り抜いた写真や、森や庭から摘んできた花で内部を飾れるようになった。つまり、ジャネットは、ハウス・キーピングの基本を全て、人形遊びを通して母から教わったといえる。

又、ジーンは、自らの母メアリーがそうしたように、庭作りのノウハウをジャネットに伝えた。羊歯や、野性の花をいかに掘り取って移植するかということである。ジャネットは、愛用の自転車の籠に、いつも移植用ごてを入れて、野草をとってきた。それらは、彼女の手によって、果樹園の古い切り株の周りに作った自分用の花壇に再び植えられた。

ジャネットは街の子供達とあまり遊ばないようにと言われていた。だから、家で過ごす時間が長かった。ジーンは、かなりの時間をジャネットと共に過ごすことが出来た。毎週土曜日には、母娘は共に掃除をし、夕食の際には、食卓にお皿を並べ、食後には皿洗いをし、食器類を拭きあげた。

食事に関していえば、ジーンが定めたのは、多くの果物と野菜、少量の肉、沢山のミルク、そして、時々、デザートとして円錐型白砂糖を一かけら添えるというものであった。春先には、骨付きのハムを、まだ柔らかい新芽のギシギシ、タンポポ、セイヨウワサビの葉といった野草類と共に煮込んだ料理を作った。裏庭にある桜の木の実が熟すと、木に登って桜桃を取るのには、ジャネットの仕事であった。それを親娘で種子を取りのぞき、ジーンが、チェリー・パイに焼きあげた。二人は、焼き上がったパイをすぐに切り分け、勝手口の階段に腰掛け、桜桃のジュースを滴らせながら、パイにかぶりついたという。野菜畑に出掛けるときには、二人とも、手に一掴みの塩を持っていった。そして、

1) Jeanette Porter Meehan, *Lady of the Limberlost* (1927; rpt. New York: Amereon House, 1972), p. 99.

二十日大根や玉葱、トマトを引き抜くと、草の上で埃や土を落としてから、むしゃむしゃと食べた。又、パン作りが大好きで、新しいレシピを手に入れると大層喜んでいて。

ジーンがジャネットに何よりも伝えたかったのは、生物を「恐れてはいけない」ということだった。生物を傷つけたり驚かしたりすることさえ無ければ、生物は噛みついたり刺したりしないということを、ジーンは娘に教えた。そのため、家の中に、様々な鳥、小動物、昆虫が居るのを常態としておいた。絨毯の上に、蛾の卵のついた端切れを置き、そこへコップを伏せてあったり、次に孵るはずの蛾の卵が、窓のカーテンに留められた紙切れで守られていたりもした。傷の手当てを受けて、止まり木で休んでいる小鳥もいた。卵から孵ったばかりの青虫が、色々な大きさの箱の中で、決まった種類の葉を食べながら暮らしていた。蛾の繭はいたるところにピンで留められていた。新しく蛹からかえった蝶や蛾は、温室の花の蜜で栄養を摂っていた。蜂蜜や、甘味をつけた水、湿らせて柔らかくした砂糖の塊が、小皿に入れられてあちこちに置かれた。その中で、母は娘に、これ等の生き物の扱い方を教えた。だから、ジャネットは、裏庭に姿を現す小さな蛇、ヒキガエル、ハサミムシでも撫でることができたほどであった。

一方、このように娘を育てる傍らで、ジーンに興味は写真へ向かい、その腕を上げていった。窓に木製のシャッターを下ろし、光が入らないようにドアの隙間に詰め物をして、ジーンは浴室を暗室に転用した。台所の流し台で、焼いた七面鳥を乗せるための大皿を使って、ネガや印画紙を洗った。そして細心の注意を払って写真を仕上げる術を身につけていったのであった。

#### (7) 作家として

ジャネットが就学すると、ジーンの時間の多くは、書く作業に費やされることになった。ジーンの内面にある「書きたい」という意欲は、彼女の息抜きや娯楽の一部に留まる事無く、やがては家庭、そして生活全体に漲るようになった。編集者が納得するような作品を仕上げるた

め、彼女は勉強をし、書く作業を行なう時間を作り出していった。しかしながら、雑誌に最初に取り上げられた彼女の作品は、小説ではなく、写真であった。『リクリエーション (Recreation)』という雑誌に、初めて、彼女の撮影した写真と、博物学上のヒントの幾つかが掲載された。彼女には、その雑誌のカメラ部門に加わるように、そして、毎月掲載用資料を提出するようにという要請がなされた。彼女は、その仕事に強い意欲を示し、撮影関係の道具にも多大な費用をかけ、備品整備を整えていった。仕事は順調であったが、やがて編集者との意見の相違から、ジーンは、『アウトイング (Outing)』誌の自然史部門に所属を変えた。カスパー・ホイットニー (Caspar Whitney) という編集者は、実に巧みに要求を伝える事が出来、ジーンはその要求を充たすだけのことを考える力と、それを支える自然の宝庫を有していた。

ホイットニーのために仕事を続けて一年余り、彼女は、短篇小説を書き上げた。それは、幼い頃の思い出を骨格に、フィクションで肉付けした作品であり、『ラディー、お姫さま、そしてパイ (Laddie, the Princess, and the Pie)』という題であった。この当時、新人作家は、雑誌社へ原稿を送り、それが編集者の目に留まれば、雑誌に原稿が掲載されるというのが普通であった。ジーンは、どの雑誌に投稿するか迷った。ジニーヴァという小さな街には、『アウトイング』や『リクリエーション』といった自然科学関係の雑誌を購読するような人々は皆無であった。だから、それまでジーンが、写真の仕事をしていることを知っている人間は、家族以外にはいなかった。だが、もし、小説が一般の雑誌に掲載されることになれば、街の人々の知るところとなる。彼女の家は、街では名士で通っている。だから、いい加減な雑誌に掲載されたりしたら、家の面目は丸潰れになってしまう。そこでジーンは、チャールズの経営しているドラッグ・ストアへ行き、様々な雑誌に目を通した。表紙が魅力的であり、活字がしっかりしており、用紙も上質、さらには、小説に登場する人物の骨格が、自分の書いたものと同質であるという

点から、彼女が選んだのは『メトロポリタン (Metropolitan)』誌であった。幸運にも、彼女の作品は採用されたが、アクシデントがあった。彼女は、採用通知を編集者から受け取ったのではなかった。その雑誌を読んだチャールズの店の支配人からの賛辞でそれを知ったのである。実は、雑誌社の使い走りの少年が、ジーンの住所を記した紙を紛失してしまい、彼女との連絡がとれなかったため、編集長ペリトン・マックスウェル (Periton Maxwell) は、小説を直接雑誌に掲載して、本人からの連絡を待つという手段を選択したという次第であった。そして、この後十年間にわたって、ジーンは、超多忙な作家生活を送るのである。

1903年、ジーンの最初の本『ショウジョウコウカンチョウ (猩々紅冠鳥) の歌 (The Song of the Cardinal)』が出版された。これは、厳寒の頃、習作を続けるかたわら、息抜きに出た散歩の途中で見つけた一羽のショウジョウコウカンチョウの死骸がきっかけとなって書かれた作品であった。その鳥は、或るハンターが、自らの射撃の技量をテストするためだけに、標的とされ、撃たれ、ずたずたに引き裂かれて、その生涯を終えていた。前述のように、鳥を追いつけたジーンにとって、無意味な死を迎えねばならなかった一羽の鳥への哀惜の想いは非常に強かった。ジーンの内部で育まれていた鳥への愛情や、ハンターへの憤り、鳥の悲惨な最後への嘆き等が衝動となって、彼女を突き動かし、彼女のペンは、小さな死骸となったショウジョウコウカンチョウに、自分の生涯を歌わせたのであった。そして、約一万語のこの物語に、自分が撮影した写真を添えて、『センチュリー (Century)』の編集者リチャード・ワトソン・ギルダー (Richard Watson Gilder) に送った。ギルダーは、語数を五万語まで増やすこと、もっと多くの写真を添えることをアドバイスし、それを、直接出版社に持ち込むことを勧めた。ジーンはその勧めに従った。一カ月をかけて書き足し、番いのショウジョウコウカンチョウの求婚から、その雛が巣立ち、旅立つまでを追った写真を添えて、出版社に持ち込み、認められて、出

版された。さらには、七ヶ国語に翻訳され、点字版も出版されたという。

翌春、ジーンが、リンバロストの森の周辺を散歩していた時、クロハゲワシ (黒秃鷲) の羽根が足元に落下してきた。それは、あたかも雲の切れ間から降ってきたかのようであった。それは、長さは約20インチ、幅は、一番広いところで約3インチもある、大きな羽根であった。空を見上げると、クロハゲワシが視界に入り、彼女が立っている場所からさほど離れていない沼地の方へと姿を消していくのが見えた。彼女は、クロハゲワシの巣がすぐそばにあるだろうと見当をつけ、苦労しながらも、実際に、森の中に巣を見つけた。吹き飛ばされて倒れた木の空洞になった部分、木が口を開けた部分から7フィート程入った部分に、その巣は作られていた。チャールズが、その木の中に潜り込み、巣の中に二つの卵があるのを確認した。ジーンは、その卵を巣から取り出してもらい、写真を撮った後、また、元のように戻させた。孵化した卵は、一つだけであった。が、ジーンは、もう一つの方の卵の写真を、雛がかえり、成長して飛び立つまでの間、二日毎に撮影した。

この経験を元に執筆されたのが『そばかすの少年 (Freckles)』である。出版されたのは1904年10月のことであった。ジーンは自分が実生活で関わった人々や自然界の動植物をモデルとして、この小説世界を構築した。前述した、一枚の羽根が落下する場面は、この作品では、次のように描かれている。

頭上の澄みきった空から、始めは、彼(「そばかす」)の顔と水平に、それからふわふわと浮いては沈み、傾いて、くるくる回って落ちてくるものがあった。それは、彼が行こうとした径に舞い降りた、艶やかな虹色に輝く、大きな黒い羽根であった。「そばかす」は、それをひっ掴むと、さっと空を見上げた。見渡すかぎり、どこにも、大木はなかった。羽根を運んでくる程の風も吹いてはいなかった。六月の蒼穹を見上げる「そばかす」の目に移るのは、目に染みるような空の蒼さと、ぽっかりと浮かんでいる二、三の白雲だけであった。まさか、鳥が凍りついたかのようにぶら下がっているなんて考えられないし、聞いたこともない。彼は、不思議そうに大きな羽根をひっくり返

し、畏怖の念にかられて、再び、目を空へ向けた。  
 「天から落ちてきた羽根！」彼は、恭しく息をついた。「聖なる天使の、羽根が生え変わる時期なのかな。いいや、そうじゃない。もしそうなら、この羽根は白じゃなくっちゃいけない筈だ。もしかしたら、白くない天使がいるのかな。神様のお使いの天使は白くって、悪魔の使いの方は黒いのかな。もし、悪魔の使いなら、神様の空に用事は無いよね。ひょっとしたら、ずっと罰を受けている可哀相な黒い天使が、神様にその辛さを分かってもらいたくて、門のところで羽根をバタバタさせたんだろうか。」<sup>2)</sup>

また、人物について言えば、リンパロストの森にある、葉の巻き上がった楓や黒胡桃の木がいかにも価値を持っているかを彼女に教えてくれたスコットランド生まれの材木切り出し人。ジーンがリンパロストの森へ向かって小さな馬車を走らせていると、必ず「気をつけて」と声をかけてくれる親切な婦人。主人公の「そばかす」は、ジーンのフィールド・ワークを手助けしてくれた石油掘出し人をモデルとした。彼の森の中での実経験と、ジーンの「人はこうあるべきだ」という高い理想を融合させたものが、「そばかす」という主人公であった。「そばかす」が深い興味を示すクロハゲワシの生態は、まさにジーンが写真を通して記録したものを文字化したものである。女主人公の「エンジェル」は、娘ジャンネットがこのように育ってくれたらという、これも又、理想の人物として描かれた。そしてジーンが、この小説の中で掲げた理想は、恵まれぬ境遇の中でもがく多くの少年の心の支えとなった事が、彼女に送られた幾多の手紙が証明している。

1904年後半から1905年にかけて、ジーンは、『婦人家庭報 (Ladies' Home Journal)』誌に、鳥についての記事を連載した。この連載を纏め、自分が撮った写真を付し、新たに経験談を書き加え、『鳥とのおつきあい (What I Have done with Birds)』を出版した。1907年初頭のことである。最初、この本の売れ行きは、あまり良くなかった。人々は、動物や植物、地表を蔽う苔、青い空、薫る風、普通の人々の日常生活に潜む

親密さといった、誕生から死へ向かっていくその過程の中にこそ、物語が存在するというのを認めなければならないからである。しかし時が経つに連れて、自然への郷愁や興味が、再び、人々の心に根差す傾向が出てきて、若干、本は売り上げを伸ばしたようである。しかし、ジーンは、「自然」という対象だけでは、人々の心を掴むのは困難だと悟った。ロマンスや、人間関係が必要なのだと強く感じざるをえなかった。彼女が到達した創作基本は、限度いっぱい迄は自然をテーマにし、それに、自分が昔から馴染んできた、質素な生活を送る市井の人々の人生で味付けをするというものであった。騒然とした汚辱溜めで生きるような登場人物は、あまり創作しなかった。男女の情愛や、仕事しか考えないといった人物も、創りだそうとはしなかった。

『虹のもとに (At the Foot of the Rainbow)』と題された本は、そのような創作理念に基づいた作品であった。自然博物誌的な部分と、必須のロマンスの部分の併せ持つ作品で、1907年12月に出版された。

次に出版されたのは、恐らく、ジーンの作品の中で、最も知名度が低いと考えられる作品である。タイトルは、『聖書に描かれた鳥 (Birds of the Bible)』という。出版にあたっては、地道な仕事ぶりと研究が必要となった作品である。ジーンは、聖書全体を丹念に読み込み、鳥に関する事項は全て抜き出した。自他の体験から分かる範囲で、全ての鳥についての生態史を書き上げた。可能な限りは、自分で撮影した鳥の写真を用いた。コウノトリや、アメリカ国内には棲息しない鳥については、博物館や、他国の写真家に依頼して、写真を入手した。そのような努力を払って完成させた本であった。しかし、この本は、完成までの努力と売り上げが比例しない本でもあった。

1909年8月、本稿でメインとして扱う『リンパロストの乙女 (A Girl of the Limberlost)』が出版された。或る意味で、『そばかすの少年』の続編と言えるこの作品は、タイトルにもあるとお

2) Gene Stratton Porter, *Freckles* (1904; rpt. New York: Amereon House,-), pp. 26-27.

り、リンバロストの森を舞台に繰り広げられる、少女の成長小説（initiation novel）である。今までの作品と大きく変わってきているのは、鳥ではなく、蛾の生態についての記述が圧倒的に多い点である。ジーンは、リンバロストの森で鳥の生態を観察するかたわら、蛾の生態にも興味を抱いて接してきた。だから、蛾を売って、学費を得ようとする少女が、どのように蛾を取り扱うかを巧みに描写出来た。この主人公の少女エルノラ（Elnora Comstock）は、ジーンの全くの創作であり、モデルと思われる人物は居ない。エルノラの母親マーガレット・コムストック（Margaret Comstock）は、ジーンがよく知っている女性の人物像を基にした。孤児となつて、エルノラの隣家に引き取られた少年ピリー（Billy）は、ジーンの家近所に住んでいて、毎日遊びにきた少年をモデルとしていた。人間を扱った部分について言えば、ほとんどが、ジーンの身近に居る人々の正確な描写と思われる。この作品には、さらに、ジーンの手書きのイラストが百枚も添えられていた。これが、リンバロストの自然の息遣いを、適切に読者に伝える手助けとなった。この本の売れ行きは、相当なものとなり、アラビア語にまでも翻訳された。また、発売後十年経った時でさえ、ジーンのもとには、熱烈なファン・レターが数多く舞い込むほどであった。

ここまでで、ジーンの生涯について、『リンバロストの乙女』執筆の時までを追うことが出来た。次稿では、作品論に入る予定である。

【つづく】

## 書 誌

## Primary Sources

Meehan, Jeanette Porter. *Lady of the Limberlost: The Life and Letters of Gene Stratton Porter*. 1927; rpt. New York: Amereon House, 1972.

## Secondary Sources

## 洋 書

Porter, Gene Stratton. *Freckles*. 1904; rpt. New York: Aeonian Press, 1977.

———. *At the Foot of the Rainbow*. 1907; New York: American,———.

———. *A Girl of the Limberlost*. 1909; rpt. New York: Amereon House,———.